

第Ⅱ章 調査概要

1 調査の経過

平城京右京八条一坊十三・十四坪にかかわる発掘調査は、大和郡山市北部清掃センター周辺整備事業に伴う事前調査として行なったものである。調査は、1984年から1986年にかけて4次5回にわたって総面積 7,500 m² に及んだ。*

これらの調査は、本調査とそれに先立つ予備調査及び補足調査とに分かれる。

1984年12月の調査は、予備調査として、大和郡山市教育委員会が行ない奈良国立文化財研究所が協力した調査、及び1985年2月に奈良国立文化財研究所が行なった調査（第156-32次調査）である。

まず、予備調査は、十四坪のほぼ中央やや東北寄りにおいて行なった。調査の結果、それまでの予想とは異なり、中世の土取りなどによって地下遺構が破壊されることなく、奈良時代の遺構が良好に保存されていることを確認し、漆紙文書などの貴重な発見もあった。続いて実施した第156-32次調査は、前記調査区の西に接する地域を対象とし、井戸1基のほか、建物や土坑などを検出し、上記の調査と同様の成果を得た。*

この2回の調査によって、この地区が铸造・漆工工房関係の場所であることが判明した。*

以上の成果によって、本調査が必須の情勢となり、関係機関の協議の結果、本格的な発掘調査を実施することを決定した。発掘に要する費用は大和郡山市が負担し、発掘調査は大和郡山市の依頼を受けて奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部があたることになった。

1985年7月からの本調査では、発掘の総面積を 6000 m² として開始した。この調査は面積の関係で、2回に分けて実施することになり、それぞれ、十三坪を対象に第168次南調査、及び十四坪を主体に第168次北調査と名づけた。この調査では、あらたに、多数の宅地関係の遺構も検出され、铸造工房との関連が注目された。ただし、予備調査区と本調査区との中間地帯は未買収地が存在したため、ひきつづいての調査は見送られることとなった。*

翌1986年度には、中間地帯の土地買収交渉が完了し、調査が可能となったため、協議の結果、前年度残された両調査区をつなぐ補足調査を実施する運びとなった。*

1986年度の調査は十四坪を対象にして11月に開始し、2箇月を要した。これが第179次調査である。この調査でも、予備調査と同様、铸造工房関係の土坑、井戸、掘立柱建物などが検出された。1987年度には、報告書作成に関する協議がもたれ、1988年度の刊行とし、内容は、本調査と補足調査の成果を中心とし、予備調査の成果も一部盛り込むことで合意した。

2 調査地域

今回の調査地域である平城京の南辺（八条・九条）は奈良市域と大和郡山市域にまたがる。この地域における従来の主要な調査について両市域あわせて概観しておきたい（Fig 1・2）。

今回の調査地の西方は、比較的複雑な地形をとる西の京丘陵にかかる。西の京丘陵では、これまで^{*}の数次にわたる発掘調査が行なわれているが、明確な条坊の遺構は検出されておらず、この地域の条坊施工の実態の解明は、今後の調査に課せられている。

一方、平坦地に属する右京八条一・二坊ないし同九条一・二坊では大きな成果をあげている。

羅城門 平城京の正門で、京最大の門である。羅城門の遺構は、1970年の調査で佐保川の堤防^{*}下に存在することが判明し、その規模・構造が明らかになった。あわせて朱雀大路西側溝、九条大路北側築地とその側溝なども検出され、平城京の表玄関の様相が明らかになった¹⁾（Fig. 2-A）。
右京 西市は、東市と並ぶ京の官営市場で、京の流通経済の中樞をになった施設である。西市の範囲は、現在、右京八条二坊五・六・十一・十二坪に比定する説が有力である。五・十二坪では、八条大路北側溝、建物、塀、井戸、溝、土坑などが検出され、多足机天板など特色ある^{*}遺物が出土している。しかし、中世ないし近世の粘土採掘で奈良時代の遺構は、いちじるしく破壊され、市の構造を示す決定的な遺構・建物²⁾は検出されていない（B）。

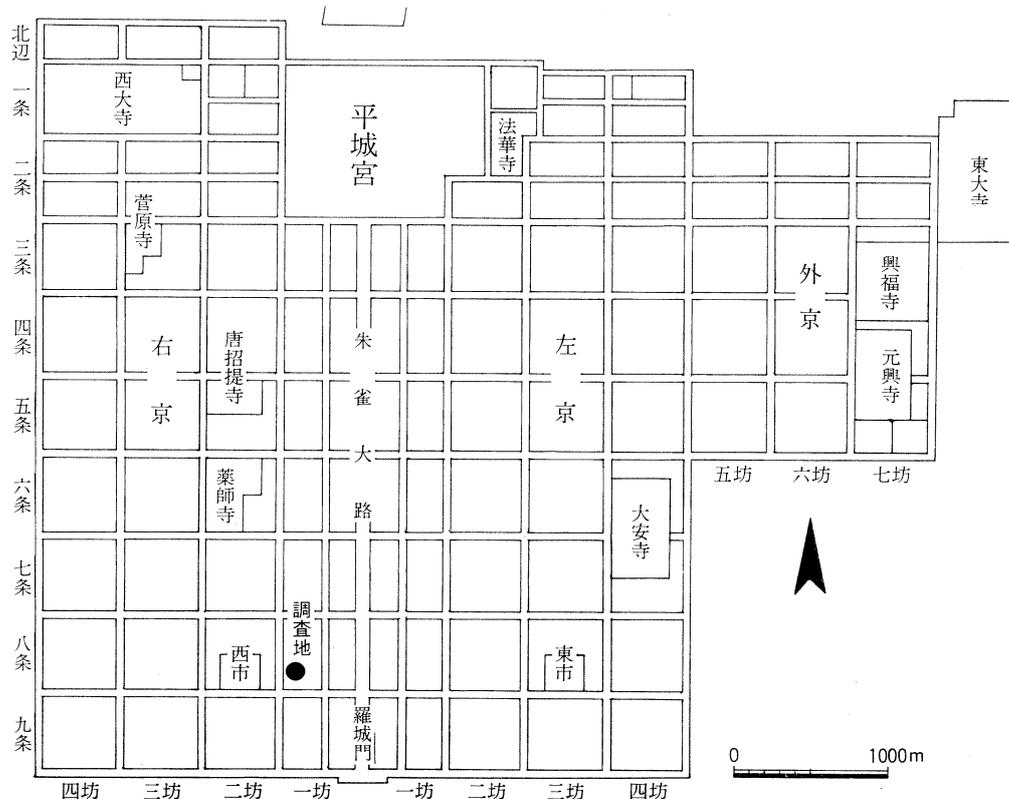


Fig. 1 平城京条坊と調査位置図

1) 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京西市跡—右京八条二坊十二坪の発掘調査』1982。

右京八条一坊十一坪では中世の土取による遺構の破壊がいちじるしかった。しかし、かろうじて残存した奈良時代の井戸からは、漆関係の遺物 (Fig. 3) も出土し、西一坊坊間路西側溝出土の未成品を含む多量の铸造関係遺物とともに、十一坪に铸造や漆工関係の工房の存在することを示唆した。また、西一坊坊間路西側溝が通常の道路側溝と異なり、物資輸送の機能をもつ大規模な運河であることも判明した。さらに、多量の土製、木製、金属製の祭祀遺物などが出土しており、祓川としての機能や西の京丘陵からの放水路の役割も想定された¹⁾ (C)。

県道九条城廻り線や市道九条線工事関連の調査 (D₁₋₃) では、九条大路の遺構とともに、小型海獣葡萄鏡 (Fig. 4) や近辺に存在が推定される観音寺の所用瓦も出土した²⁾。

この他、右京における条坊関係の調査としては、右京九条四坊七ないし十坪 (E)、右京八条二坊十四坪 (F)、右京九条三坊十二坪、右京八条一坊西一坊大路 (G) などの調査がある³⁾。

左京 左京八条、九条の状況をみていきたい。この部分は奈良市内に含まれている。これまで特筆される調査として、東市、左京九条一坊五・十二坪、左京九条三坊十坪、左京八条三坊、左京八条一坊三・六坪、左京九条東堀河⁴⁾ (H) などがあげられる。

東市は、西市と並ぶ官営市場であり、現在では、左京八条三坊五・六・十一・十二坪に比定する説が有力である。奈良市教育委員会による計画的な調査が継続されており、市推定地の北西部に櫓状建物や、堀河にかかる橋などが検出されている⁵⁾ (I)。

左京九条一坊五・十二坪では、大規模な河川跡と岸部で特殊な土坑群が多数検出され、多量の土馬などが出土している。京内河川、特に佐保川の旧流路に関し、新たな知見をもたらした。また、特殊な土坑群は京南辺部の特殊性をうきぼりにする⁶⁾ (J)。

左京八条三坊九・十・十五・十六坪は、約 9000 m² におよぶ大規模な調査で、九・十坪を中心に建物90棟余りが検出され、1/16町などの宅地割が確認された。また、埴塙、鞆羽口、漆用

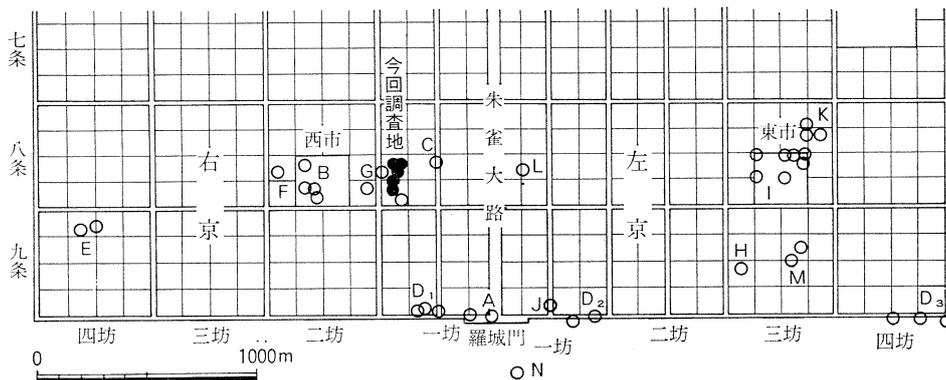


Fig. 2 平城京南辺 (八条・九条) と調査位置図

- 1) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984。
- 2) 奈良国立文化財研究所『平城京九条大路一県道城廻り線予定地発掘調査概報 I』1981, 同『昭和56年度平城概報』1982, 同『市道九条線関係遺跡発掘調査概報 I ~ III』1983~1985。
- 3) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京右京九条四坊七・八・九・十坪発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度』1985, 大和郡山市教育委員会『平城京右京八条二坊十一・十四坪発掘調査概要報告』1984, 大和郡山市教育委員会『平城京西一坊大路』1987。
- 4) 奈良国立文化財研究所『平城京東堀河一左京九条三坊の発掘調査』1983。
- 5) 奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査 I ~ IV』1983~1986。
- 6) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和を掘る—1985年度発掘調査速報展 VI』1986。

の刷毛などの出土から鑄造工房、漆工の工房の可能性が指摘されている。東市の北辺には、深さ約 1.4 m の堀河が検出され、墨書土器、土馬などが出土している¹⁾ (K)。

左京八条一坊三・六坪では、漆紙文書などを伴う奈良時代の遺構以外に、中世佐保川の旧流路、大和平野では例の少ない古墳時代中～後期の集落が検出されている²⁾ (L)。

- * 左京九条三坊では小規模な宅地割の実態があきらかになった。二行八門制による1/16町宅地が奈良時代前半から形成されており、奈良時代後半には細分され従来史料上でのみ知られていた1/32町宅地が初めて遺跡で認められた³⁾ (M)。

最後に京の外縁部に触れておこう。

- * 羅城門の南約 0.2 km に長塚遺跡がある。この遺跡はいわゆる京南辺特殊条里に含まれ、その復原案に合致する溝が検出されている。また、直径、深さともに 1.5m ほどの土坑が 6 基あり、建物も 5 棟検出されている⁴⁾ (N)。出土遺物からみて、奈良時代に属しており、平城京と時間的に並行していることは確実である。

従来のように、京の南部には、都城の景観と対照的に水田地帯が広がるといったこれまでの景観復原に再考をせまることになるろう。

- * 以上、京南辺部の調査を概観してきた。その調査はまだ緒についたばかりであり、今後の発掘調査の進展が期待される。東西両市の周辺で大規模な調査が実施された結果、両者の遺跡が共通の様相を示すことも大いに注目されるところである。

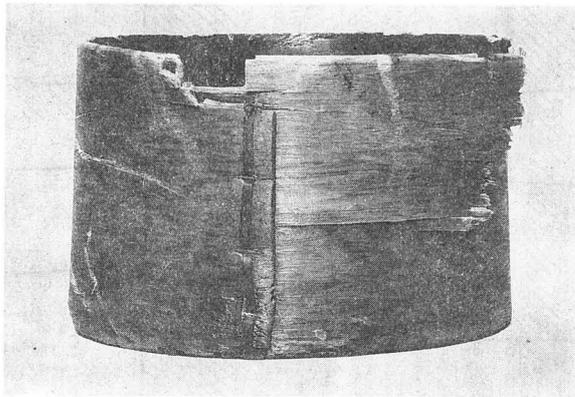


Fig. 3 十一坪井戸 SE 930 出土の漆容器の曲物 (1:4)



Fig. 4 九条大路北側溝出土の海獸葡萄鏡 (3:4)

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報—東市周辺東北地域の調査』1976。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』1985。

3) 奈良国立文化財研究所『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告』1986。

4) 大和郡山市教育委員会『長塚遺跡発掘調査概要報告書』1987。

3 調査概要

今回報告の対象とするのは、1984年度から1986年度にかけて調査した奈良県大和郡山市九条町、すなわち平城京右京八条一坊十三坪及び十四坪にかけての地域で、調査総面積は、7,414m²である。各調査地区は、奈良国立文化財研究所が行なっている平城京発掘調査の地区設定にしたがって、大地区を6AII区、中地区を南からQ・P・O区と定めた (Fig. 5)。各調査ごとの * 期間、地区名、面積等は Tab. 1 のとおりである。

条坊	調査回数	調査地区名	調査期間	調査面積 (m ²)
十四坪	大和郡山市	6AII-O区	1984.12.19~1985.2.18	890
十四坪	第156-32次	6AII-O区	1985.2.20~3.2	324
十三坪	第168次南	6AII-Q区	1985.7.10~10.4	2,200 *
十三・十四坪	第168次北	6AII-Q・P区	1985.10.4~1986.1.27	2,900
十四坪	第179次	6AII-O区	1986.11.7~12.26	1,100

Tab. 1 各次調査の期間と面積



Fig. 5 6AII地区地区割図 (斜線部; 条坊遺存地割)

ここで、今回報告する調査区における地区設定について述べておきたい。

従来、地区の設定については、大地区がおおよそ決められているだけで、細かな中・小地区の設定は調査の際に個別に行なうのが通例であった¹⁾。そのため、同じ大地区内でも場所によっては小地区が微妙にずれたりすることもあった。調査件数が激増し、調査主体も多様化する傾向にある今日、こうした地区設定の体系化が急務となっている。

右京八条一坊における調査は、1983年の第149次調査(6AII-O, N区)が最初で、その時に中・小地区を設定している²⁾。その方法は、八条大路と西一坊坊間大路の交差点心を朱雀大路の国土方眼第VI座標系に対する偏度(N 0° 15' 41" W)を考慮して推定復原し、この位置に最も近似する3の倍数値(X = -149,215 Y = -18,572)を選択して6AII-AA01区の東南隅とした。ただし、この地区設定の方法は、本発掘調査時における暫定的なものであり、今後、平城京全域にわたる地区設定の体系化がのぞまれる。

3の倍数値とした理由は、小地区が3mを一辺とする正方形だからである。6AII-Q区はAからUまで、6AII-P区はAからLまで、そして6AII-O区はNからTまでのアルファベットを用いて小地区を設定した。ただし、第156-32次調査の6AII-OJ, OK区は、第179次調査の6AII-OF, OG区と重複している。

以下に、各次数ごとの調査概要を述べる。ただし、調査の時点での見解であるので、その後の遺構・遺物の全面的な検討によって、解釈を改めた点や新たに判明したことも少なくない。

A 大和郡山市調査

この調査は十四坪に関する最初の調査である。調査区は、十四坪中央北寄りに位置する。

* 調査地周辺のこれまでの調査では、たとえば、右京八条二坊十二坪(西市第1~3次調査)とか右京八条一坊十一坪(第149次調査)のように、中世の土取りによって奈良時代の遺構がいちじるしく破壊されている場合が多かったが、今回の調査区にはこうした土取りは全く認められず、旧水田耕土下1.0mで奈良時代の遺構が良好に遺存していることがわかった。

検出した主な遺構は建物、塀、井戸、土坑、溝などである。

* 建物は、2間×3間、あるいは2間×2間などの規模であるが、うち1棟は、2間に3間の総柱の大型建物である。井戸は、方形縦板組、横棧をもつ構造で、井戸枠内から土馬、檜扇、箸、堅櫛、柄杓、折敷などの木製品が良好な保存状態で出土した。炭化物土坑は、十数基あり、狭い部分に集中しており、形態や大きさは一定しない。その大部分に灰層の堆積があり、なかには底面や壁の部分が火熱を受け、焼けしまっている土坑がある。同じような土坑群は左京三条四坊七坪(第116次調査)でもみつかっている。また、坑内からは、埴塼、羽口、鉦滓が出土した。また溝状の土坑からは漆の付着した土器が多量に出土した。須恵器の壺がほとんどで、漆の貯蔵容器と思われる。漆の乾燥を防ぐため、口頸部に差し込んだ栓も出土している。これらとともに漆紙文書も出土した。

このように、漆の付着した土器や鞆羽口を出土する炭化物土坑などからみて、鍛冶や漆工に
* 関係する工房が存在したと思われる。東市に隣接する左京八条三坊九・十坪(第93・94次調

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』1975, p. 51「平城京跡発掘調査要綱」参照。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984, p. 2。

査)でも、漆工に関する工具などが出土しており、今回の調査を含めて、市の周辺には多分野にわたる工房が存在した可能性が高まった¹⁾。

B 第156-32次調査

先の調査区の西に接する部分を対象に調査を行ない、東と同様、井戸を中心として建物、塀からなる区画がつづいて存在することを明らかにした調査である。*

検出した主な遺構には、建物10棟、溝3条、井戸1基、土坑多数がある。

この調査区でも土坑、溝には、焼土、炭化物を含むものが多数あり、とりわけSB 2065の南方には多数の炭化物土坑が密集していた。調査区の北端には東西方向の溝があり、十四坪の北からほぼ1/4の位置にあたり、坪内の区画にかかわるものと考えられた。井戸枠内からは奈良時代前半の土器や、軒丸瓦6225C型式、軒平瓦6646Ba型式のほか、曲物・折敷・櫛・刀子・鉄鎌・韃羽口・骨など多様な遺物が出土した。*

調査区全域における多量の焼土の存在とともにこの場所が東と一連の鑄造工房である可能性が強くなった²⁾。

C 第168次南調査

先の調査区の南方約80m、十三坪の北半西寄り部分を対象にした調査である。この調査は十三坪における最初の発掘調査で、十四坪におけるような状況がこの坪にも及んでいるかどうか調査前の大きな関心であった。*

まず調査区の土層は、水田耕土直下に川の氾濫の痕跡とみられる厚さ1mを越す砂層の堆積があらわれた。このため、当初は奈良時代の遺構はすべて失われているかとも思われた。しかし、調査の進展につれて、その砂層堆積の下に中世の整地層を介して奈良時代の遺構が良好に遺存していることがわかった。この砂層堆積は北の十四坪の調査区にくらべて南ほど厚くなっており、この場所が近世初頭に秋篠川の付け替えによって東へ直角に曲げられた場所に近いため特に厚く堆積したものとみられた。

検出した遺構には、建物・井戸・土坑・溝などがあり、大きく3時期に分けられる。

I期 東を南北方向の道路で画し、坪の1/4を一体とする地割で、最も整った建物配置をもつ時期である。主屋は、身舎5間、梁間2間北庇付きの東西棟で、この北の東西に2棟の南北棟を対称におき、コ字形配置とする。さらに、主屋から南に離れて東西棟(身舎3間、梁間2間南庇付)があり、西北に総柱建物2棟と南北棟4棟がある。この時期には、井戸2基を伴う。*

II期 塀および南北溝によって、先の1/4町が4分割されて、1/16町を単位とする4区画に変わり、主屋と副屋からなる2ないし3棟の建物と井戸1基が基本的な構成となる。*

III期 地割のための南北溝が廃され、1/8町を単位とする東西に長い2区画となる。北半の区画は、主屋・総柱建物からなり、南半の区画は、主屋・副屋・総柱建物からなり、それぞれに井戸が付属する。

これらの遺構の年代は、I期が8世紀前半から中ごろ、II期が8世紀中ごろから後半、III期

1) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和を掘る—1984年度発掘調査速報展』1985, p.58。 2) 奈良国立文化財研究所『昭和59年度平城概報』1985, p.65。

が8世紀後半から8世紀末と考えられる。

I期の遺構は、コの字形配置の建物を中心にして、多数の付属建物を伴っており、通常の宅地というよりは、官衙的な色彩が強いと考え、II・III期の遺構については、基本的には宅地としても、工房にかかわるものの宅地である可能性を考えた。

- * 宅地割では、正方形の1/16町地割がはじめて姿をあらわした。これまでに知られている1/16町宅地は、横長であったので今回新たな分割方式が知られたことになる。

この調査では、地鎮具を含む土器埋納遺構3基も検出した。そのほか海獣葡萄鏡、あるいは鉄鉗、砥石などの鍛冶具等の出土遺物も注目された。¹⁾

なお、この調査と併行して、十三坪の南端で、県道拡幅に伴う小規模な発掘調査を行ない、

- * 羽口を含む奈良時代の土坑 (Fig. 6 ; SK 2090) などを検出した (第164-10次調査)。

D 168次北調査

この調査地は、大部分十四坪に属するが、調査区の南端で168次南調査区と重複させ前回の調査の及ばなかった十三坪北端の様相をも明らかにした。この調査でも土層の状況はこれまでと変わらず、上には、厚い砂層があったが、中世の整地層の下に、奈良時代遺構面がよく残っていた。遺構検出面の地山は、十三坪にくらべ、粘質土の部分より砂質の強い部分が多い。

この調査でも、前回と同様、多数の遺構を検出した。この調査では、十四坪の遺構を中心に、大きく4期にわけて考えた。坪境小路とその南北両側溝は2時期あり、I期には、古い小路が、II期～IV期には新しい小路が対応する。

- * **I期** 坪境小路と、十三坪・十四坪との間は、それぞれ築地で区画される。十四坪は、南北方向の築地によってさらに東西に2分され、坪内には4棟の建物が点在する。

II期 区画施設が塀に変わり、1/32町という、ひとつの区画が、東西約27m、南北約12ないし15mの東西に細長い宅地になる。宅地内の西端に南北棟建物1棟(桁行4間、梁間2間東庇付)を建て、その東に井戸1基がある。1/32町宅地は左京九条三坊十坪(第166次調査)に次ぐ平城京で2番目の発見となった。

- * **III期** II期と宅地割に大きな違いはなく、宅地内の建物構成が若干変化する。東南の宅地では、東西棟建物2棟が南北に並ぶ構成となる。この建物群の西側に2間×1間の小型建物があり、建物内に胞衣壺を埋納した円形の土坑がある。この建物は、規模や、胞衣壺の存在から産屋ではないか²⁾と考えた。また、西北の宅地は、宅地が北へ広がり、東南の宅地と同じように東西棟2棟が建つ。

- * **IV期** この時期には坪を東西に2分する区画施設が、2条の素掘り溝に変わる。この時期は、全体に建物密度がうすくなり、宅地内には、南北棟2棟が建つのみである。

これらの遺構の年代は、胞衣壺の年代などから、I・II期が奈良時代前半、III期が奈良時代中ごろ、IV期が奈良時代後半と考えられる。

出土遺物には、坪境小路両側溝、そのほかの溝、井戸、土坑などから多数の土師器、須恵器、

- * 若干の瓦、銭貨などのほか羊形硯、漆紗冠、富本銭などこれまで出土例の少ないものがある。³⁾

1), 3) 奈良国立文化財研究所『昭和60年度平城概報』1986, p. 70 および『年報1986』1987, p. 30。

2) この建物はその後の検討により、建物としては、まとまらないことが明らかになった。

E 第179次調査

この調査区は、十四坪のほぼ中央にあたり、大和郡山市調査区・第156-32次調査区と第168次北調査区との間の未調査地を対象とした調査である。

検出したおもな遺構は、奈良時代以前の斜行溝1条、奈良時代の塀5条、建物24棟、溝4条、井戸3基、及び炭化物を多く含む土坑群などである。*

奈良時代の遺構は大きくA・Bの2時期に大別することができ、各時期は、さらに細分が可能である。

A期 道路遺構S F 1970によって坪内は東西に2分され、その東半分には、桁行6間、梁間2間の南庇付で、間仕切のある東西棟が中心にあり、それを囲むように建物、総柱倉庫がある。これらの建物の間をぬうように円形、長円形の土坑や、炭化物を多く含む不整形な土坑が多数*存在する。とくに後者の土坑群の出土品では、埴塼、鞆羽口等の土製品のほか、帯金具の未製品、留針など、铸造工房と関連するものがめだつ。井戸も含めて、金属製品の製作にかかわる遺構と思われる。S E 1867からは、平城宮と同形の軒平瓦とともに、木筒も出土した。

B期 十四坪内が居住区域として細分される時期で、十四坪中心を東西に画する道路遺構はそのまま踏襲され、区画塀S A 1900などによって一坪をさらに1/16に細分している。第168次北*調査では、一坪を1/32に分割する宅地割が確認されており、同じ坪内でも宅地割に大小のあることがわかった。

これまでの調査成果とを総合すると、十四坪の北3/4の区域と、南1/4を含めた十三坪の区域とは、遺構の様相が異なっていることが明らかとなった。北側は、炭化物を含む土坑群をともなう建物を中心に倉庫などがあり、南側は、小規模な宅地内に規格性の高い建物が配置される*区画である。すなわち、十四坪の中では、北3/4が金属製品を製作する工房、南側が居住区域という使い分けがなされていたとみられる。そして、後にこの居住区画は、さらに北へも及び、宅地を細分し、1/16あるいは1/32町¹⁾の宅地として利用していたことが明らかになった。

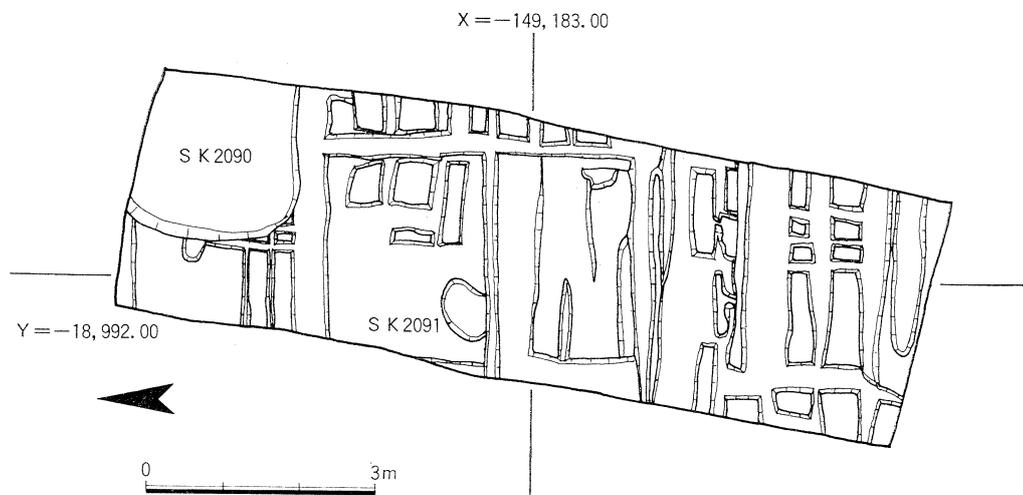


Fig. 6 第164-10次調査実測図 (1:100)

1) 奈良国立文化財研究所『昭和61年度平城概報』1987, p. 75 及び同『年報1986』1987, p. 30。

4 調査日誌

A 大和郡山市調査

6 AII-O 地区

1984年12月19日～1985年2月18日

- 12・19 調査開始。重機で表土除去にかかる。
- 12・22 調査区東部の遺構検出に入る。
- 12・25 土坑SK2001掘り下げ。軒丸瓦や、多数の漆貯蔵土器類出土。
- 1・10 調査再開するも降雪で中止。
- 1・16 土坑SK2016, 2017掘り下げ。いずれも黒色灰層が堆積し、よく似た状況である。
- 1・18 井戸SE2020の掘り下げ。檜扇、箸、曲物などが出土する。
- 1・21 SK2051掘り下げ。灰、炭粒を多量に含む。埴塼出土。底も熱を受け、バリバリした感じ。
- 1・26 調査区西辺の精査と掘り下げ。焼土、炭、灰等の堆積する土坑が多い。
- 1・29 SK2046から多数の土師器出土。
- 2・2 SK2001の掘り下げ完了。
- 2・5 調査区南端で大型建物SB1890検出。
- 2・8 写真撮影行なう。
- 2・10 実測用遣方設定開始。
- 2・12 SK1886の掘り下げ。
- 2・14 実測用遣方設定完了。
- 2・15 遺構実測を開始。
- 2・18 実測完了。調査打ち切る。

2・20 発掘器材の搬入。重機による表土除去は半日で終了。測量行ない地区杭打つ。

2・21 遺構検出開始。焼土、炭を含む土坑や柱穴見え始める。柱根も数箇所残る。遺跡のベースは南半部が茶褐色粘土、東よりと北半部は砂質。遺物は灰褐色で取上げ。砥石、土器少量出土。

2・22 遺構の掘り下げ開始。土坑には焼土、炭を含むもの多い。大量の土器を含む土坑あり。土坑と柱穴の重複箇所では、ほとんど柱穴が新しい傾向あり。西南部のベースは堅く締まった暗褐色粘土で若干の土器を含む遺物包含層。

2・23 焼土を含む土坑はあるが、壁自体が焼けているものは見あたらない。東西棟SB2081は3×2間でまとまる。OM52区の方形土坑は井戸枠らしき板材がのぞく。土馬、軒丸瓦出土。

2・25 南端の土坑群を残して一応遺構検出終える。方形土坑は井戸と確定(SE2070)。

2・26 南辺土坑群掘り下げと清掃、写真撮影完了し、実測用遣方設定まで終了。

2・27 遺構実測開始。並行して遺構検出の補足にかかる。南辺土坑群を掘って大型の方形柱穴あり、SB2065と柱筋が揃い同一の建物か。柱穴には柱痕跡や抜取穴等はなく、埋土も堅く締まっており通常の柱穴とは様相が異なる。

3・1 遺構実測。井戸SE2070断ち割り開始。掘形は2段掘りと判明。南辺には多数のピットや土坑を検出した。

3・2 土層図作成。柱穴等の断ち割り調査。地盤が軟弱のため、井戸枠の取上げ難渋する。本日にて調査を終える。

B 第156-32次調査

6 AII-O 地区

1985年2月20日～3月2日

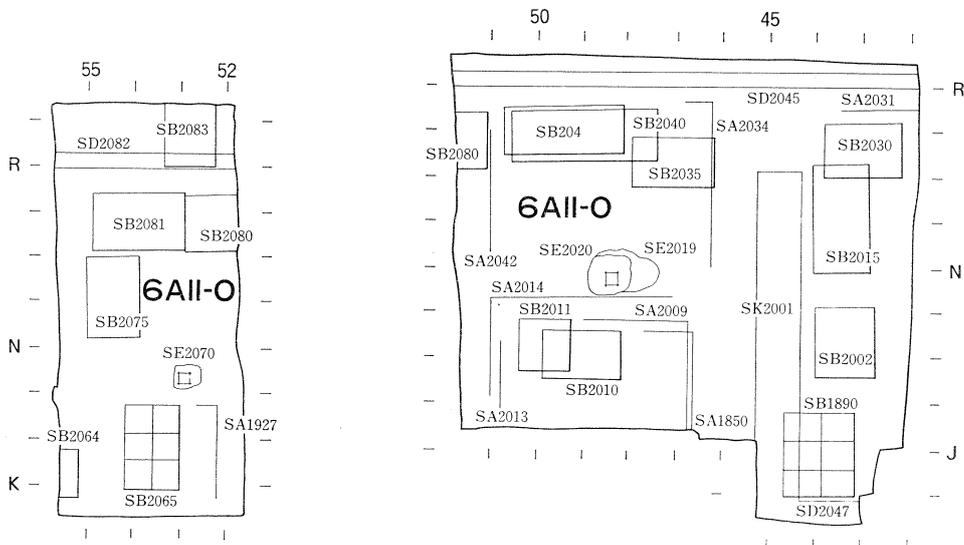


Fig. 7 大和郡山市(右)および第156-32次(左)調査地域の地区割と主要遺構(1:500)

C 第168次南調査

6 AII-Q 地区

1985年7月10日～10月4日

- 7・4 発掘区設定。
- 7・10 発掘区の整備。西端から重機による表土除去開始。水田耕土下には、通常見られる床土はなく、砂層が厚く堆積している。上から30cmはマンガンが沈着し、近世陶器を含む。小溝が多数見える。
- 7・11 耕土下の層（青灰砂層）から瓦器質鉢片出土。発掘調査用プレハブ建設。
- 7・12 昨夜来の大雨で発掘区はプールと化す。
- 7・13 発掘調査用配電完了。
- 7・15 昨夜の雷雨で発掘区再び水没す。
- 7・16 表土除去完了。排土移動は未完。
- 7・17 排土移動。
- 7・18 排水完了。
- 7・19～25 再び重機による排土作業。
- 7・26 発掘区整備。
- 7・27 地区杭補充。土層観察用畔設定。
- 7・29 北端から遺構検出開始。柱穴見え出す。灰褐色土には土器多く、瓦少ない。
- 7・30 R～Sラインまで。ベースは青みがかかった灰褐色粘質土。焼土含む土坑、溝、柱穴など遺構の密度高く、重複甚だ多し。新旧の認定にしばし悩む。
- 7・31 S～Rラインまで。柱根残す柱穴あり。58～55ラインに南北溝SD1412、1464など4条の南北溝あり。ほぼ坪内の東西二分位置にあたり、坪内道路とその側溝か。
- 8・1 R～Qラインまで。遺構密度相変わらず高い。南北棟のSB1405の北妻検出。西端には炭化物のびっしり詰まった土坑SK1430、1438検出。いずれも土坑の底はデコボコ。灰褐色土から円面硯出土。
- 8・2 Q～Pラインまで。東西棟SB1391の北側柱部分見える。灰褐色土と遺構検出面との間に部分的に暗青灰粘質土あり、奈良時代の包含層らしい。
- 8・3 P～Oラインまで。QP65区の土坑SK1398の周辺は土層が複雑で、地山と埋土との差が微妙。スラグ出土。
- 8・5 O～Nラインまで。QN67で地鎮具埋納坑SX1400検出。土坑を切る小穴に土師器小皿4枚以上、和同銭10枚以上が入っている。写真撮影、実測終了。南北棟SB1423、1405ほか塀SA1414など検出。
- 8・6 N～Mラインまで。南北棟SB1405とまる。すぐ西の南北塀SA1339は、坪内区画施設か。地鎮具埋納坑SX1400の南に土器埋納坑SX

1401あらわる。土師器小皿多数あれど銭などはなさそう。

8・7 土器埋納坑の精査、写真撮影、実測完了。65ライン南北塀SA1399は、同位置の南北溝SD1398埋土から柱穴見える。灰褐色土から軒丸瓦出土。

8・9 N～Lラインまで。南北棟SB1402とまる。東西に2列の柱穴あり。

8・9 QN54区で炭化物を含む大土坑SK1373検出。石帯、軒平瓦出土す。東西棟SB1380・1381が重複する。SB1380は、北に10尺の広庇付くか。QK65区井戸SE1385は掘形、抜取穴が二重に見える。

8・10 M～Kラインまで。井戸SE1385掘り下げ開始。西側の土坑SK1376より新しいことが判明。東西棟SB1406東妻確認。

8・12 土坑SK1376から円面硯出土する。K～Jの東西方向一列に柱穴多数あり、塀か（のちに塀SA1371と確定）。これから南は遺構少なくなる。

8・13 65～67あたりのベースは砂質。炭化物多く含む土坑SK1367検出。

8・16 I～Gラインまで。ベースが砂質であるため遺構は、便宜上リング状の土手を残して掘り進める。井戸SE1365検出。奈良時代井戸としては2基目。南北棟SB1350検出。QG61区灰褐色土などから土馬出土。

8・17 I～Fラインまで。製塩土器が充満する土坑2箇所、SK1347、1353検出。56～58のあたりのベースは再び粘質土になる。

8・19 G～Fラインまで。67、68のあたりは炭化物含む土坑多い。その中には井戸が含まれる可能性あり。南北棟SB1344の南妻検出。

8・20 G～Dラインまで。南北棟SB1362南妻検出。

8・21 F～Eラインまで。南北棟SB1344の南妻を検出。不整形土坑SB1342検出、大量の土器含む。54ライン東端で土坑または溝らしき遺構見える。

8・22 E～Dラインまで。南北棟SB1343検出。東西棟SB1326検出。近代の野井戸を挟んで南北棟SB1330検出。

8・23 Cラインまで。SB1343南妻を検出し、桁行3間でとまる。さらにその東に東西棟SB1325がまとまり、先に東西棟1棟とみなしたものは2棟にわかれることが判明。このあたり小柱穴多い。

8・24 1回目の遺構検出が発掘区南端に到達。西端に井戸SE1315が顔を出す。東西棟SB1327は南庇付か。

8・26 B～Cラインまで。QB57区の井戸SE1305は掘形の輪郭線が二重にある。井戸に作りか

えあるか。

8・27 Fラインまで。南北棟SB1336の北妻確認。これで2×4間以上となった。不整形土坑SK1304の下層に深い土坑あり。

8・28 土坑SK1304はずっと南にのびる。南北棟SB1324の柱穴は、土坑SK1304の肩に切られている。

8・29 土坑SK1356に墨書土器「大」「丁」などあり。南北棟SB1340は3×2間でまとまる。

8・30 I～Lラインまで。東西塀SA1371さらに西に1間のびる。この塀は、いよいよ坪内区画施設らしくなってきた。東西棟SB1363の柱穴は長方形土坑SK1361の底で検出。

8・31 I～Mラインまで。南北塀SA1430は坪内を東西に2分する施設か。東西塀SA1371の東延長は、SA1430にとりつきL字形の塀になるか。大土坑SK1376の掘り下げ。土器多量出土。

9・1 K～Mラインまで。QK57区の土坑は井戸と判明(SE1375)。これに南北溝SD1407が重複する。東西棟SB1380(5×3間)はメイン建物か。内部の3箇の柱穴は間仕切または束柱の可能性あり。

9・3 M～Sラインまで。南北棟SB1425は2

×3間以上で、北妻は発掘区の外。南北棟SB1404は3×2間でまとまる。東端の南北溝SD1464は北へ掘り進む。

9・4 南北棟SB1395は桁行1間のびて4×2間となる。これと重複する南北溝SD1408との新旧関係は未確認。写真測量のための標定点測量完了。

9・5 写真測量の空中写真終了し、地上撮影開始する。

9・6 地上写真撮影続行。

9・7 地上写真撮影完了。

9・9 井戸の掘り下げ開始。予想に反して、掘り下げ始めた5基すべてに井戸枠の遺存を確認。縦板組、横板組、円形くりぬきの3種あり。

9・10 井戸の掘り下げと掘形断面割り。さらに1基の掘り下げ開始。井戸SE1305の枠内底から海獣葡萄鏡出土。この井戸の枠は半円形のくりぬき材を2枚合わせたもの。

9・13 井戸の掘り下げと現地説明会に向けて全域の清掃行なう。SE1365から墨書土器「井屋」など出土。SE1315底から須恵器壺(漆容器で栓を詰めてある)、鉄鉗、鉄匙、大型砥石など出土。鍛冶具そのものの出土は注目された。

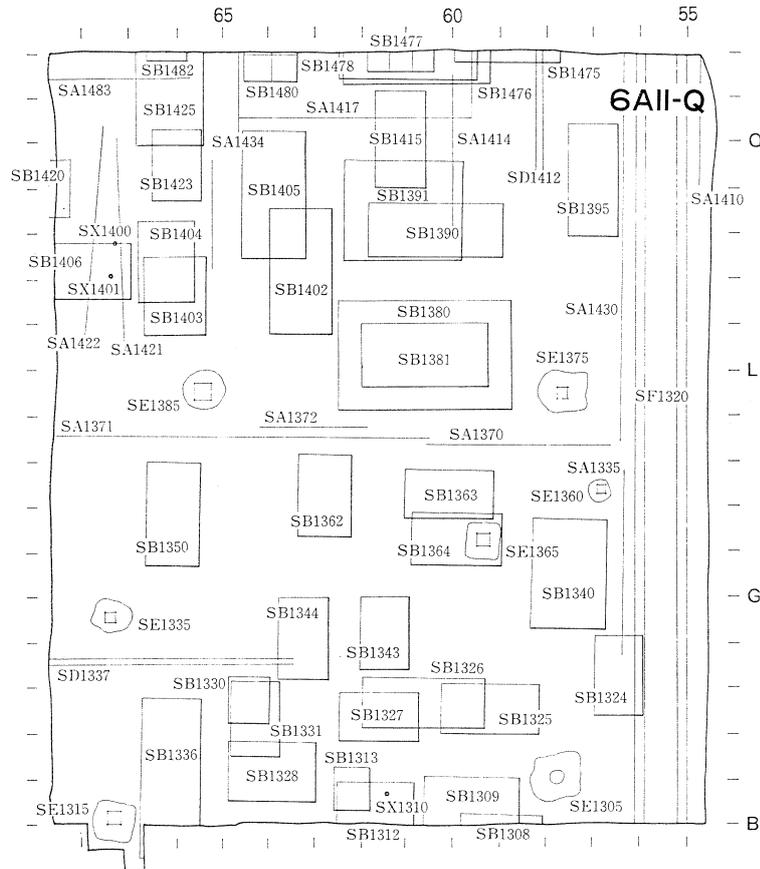


Fig. 8 第168次南調査地域の地区割と主要遺構(1:500)

9・14 井戸写真撮影。午後1時30分から現地説明会。来聴者約100名。

9・17 土層観察畔はずし、遺構の精査、井戸の掘り下げ、断ち割り行なう。西南井戸SE1315の南半部を拡張する。SE1335の掘形は2段掘り。

9・18 井戸精査と断ち割り。SE1365掘形断面地山に「ミツガシワ層」あらわれる。

9・19 柱穴断ち割りと井戸精査。SE1305の掘形は二重に見えるが、内側のそれは、枠に粘土を巻いたものか。

9・20 SE1375の掘形に2時期あること判明。下段枠が当初で、上段枠は後のもの。下段枠に多足机が転用されている。

9・21 SE1375井戸枠取り上げ完了。枠材に曲物の転用見られる。

9・24 次回の発掘区設定し、重機投入し、表土除去開始するも豪雨で中断。

9・25 SE1305井戸枠取り上げ及び土層図作成。次回発掘区の表土除去と電源移動。発掘器材整備。

9・26 SE1315、SE1385井戸枠取り上げ。土層図作成。QB61区埋納遺構SX1310精査開始。次回発掘区の測量完了。

9・27 SX1310の精査。柱根取り上げ。土層図作成。井戸SE1315の東南部を拡張し、南北棟SB1336の南妻を捜す。

9・30 発掘区西壁の土層図作成。SK1438完掘。拡張区の遺構検出で、南北棟SB1336の西側柱5間目まで確認。南北土層観察畔除去開始。

10・1 土層図作成続行。東西土層観察畔除去完了。QI56区土坑は掘り下げにより小型の井戸と判明(SE1336)。

10・2 柱穴の精査。

10・3 柱根の取り上げ。砂による遺構養生開始。

10・4 養生作業完了し、本日で調査終了。

D 第168次北調査

6 AII-Q・P地区

1985年10月4日～1986年1月27日

10・4 発掘区壁掃除、排水溝掘り、地区杭打ち完了。

10・6 重機による南半部表土除去作業。

10・7 重機による表土除去完了。西端から東向きに遺物包含層(灰褐色土)の掘り下げ開始。

10・9 西端から灰褐色土を除去し、その下面で遺構検出。68ラインまで進む。Aラインあたりで東西溝見え出す。十三・十四坪の坪境小路の南側溝か。路面らしき部分に赤褐色粘土あり。この溝の北肩にかぶる。溝には2時期あるか。PG65区で土師器皿数枚を円形に並べた遺構SX1589見え出

す。

10・11 67ラインまで。南北柱列検出。その西に大型掘形あり東西棟で庇になるか。Fライン以南は包含層が残り、地山がでず、複雑な土層の堆積となる。

10・12 67ラインまで。灰褐色土面に中世の小溝多数あり。

10・15 東西棟や南北棟の一部らしき出る。PG65区土器埋納坑SX1589の精査。

10・16 66ラインまで。PE62区にガラス層あり、土器と埴輪出土。PD66区ピットに須恵器杯逆位置にあり。F・Gライン間で東西に並ぶ柱穴あり。SX1589の土器取り上げ。PS66区に方形掘形の西辺のぞく。井戸か。

10・17 66～64ラインまで。PE65の土坑は、井戸らしくなってきた。66ライン上に炭化物を多量に含む南北溝SD1584あり、Uラインの南1mで、南側溝の南肩検出。南北の柱穴と重複するも前後関係未確認。

10・18 遺構検出。66～64ラインまで。Aラインの小路路面には赤褐色粘質土無く、南北両側溝の両肩が不明確である。北よりは地山が砂質になっており、北端では粗砂質となる部分がある。前回の検出と合わせると2×2間の総柱建物SB1480がまとまった。

10・19 東に向かって遺構検出。道路側溝南肩が63ラインあたりで北へ曲る。PI63区に凝灰岩、焼石が集中する箇所あり。礎石の根石か。62ラインに南北方向の土層観察畔を設定する。

10・21 63～62ラインまで。OU62区の野井戸SE1448の北側、土層畔のあたり南側溝の北肩にしがらみのあることが判明。南側溝自体に2時期あり、幅を狭くし、北肩にしがらみを組んだことがわかる。PF61区灰褐色土中に土器埋納遺構SX1572あり。PF61区に瓦が立った状態である。PA62区のあたり、北側溝南肩に炭化物の厚い堆積がある。

10・22 62～61ラインまで。QU60区東西溝上層から須恵器の羊形硯出土。左京四条四坊(141—9次調査)のものによく似る。南側溝の北肩は、東からのびる溝状の土坑SK1517に切られ、不明。小路路面上に、炭化物を多く含む土坑があり、路面は荒れている。小土坑SK1578・1579には土師器甕がすわっている。PC60区にL字形溝SD1538検出。総柱建物SB1477が見え始める。

10・23 61～59ラインまで。小路上面は、相変わらず東西方向の溝状土坑で切られ、路面はほとんど残っていない。南側溝付近、土馬多数出土。QS59あたりの柱穴は平均3回の重複あり。PH59区に大土坑SK1984検出。

10・24 58～56ラインまで。QT58区に柱穴あり、東西塀になるか。QS57区の土坑SK1469は

北端が出てまとまる。埋土は暗灰色粘土で遺物多い。

10・25 57～55ライン。56ラインに南北溝SD1567検出。坪内道路の西側溝と思われる。この溝は2時期あったようで、北側溝に接する所では確認できない。PQ55ライン付近で土馬多数出土。鍵の手状の溝SD1538は、57区で北へ折れる。小路路面上には依然として多数の土坑あり。

10・26 東向きに遺構検出。新聞記者発表。

10・28 54～53ラインまで。PD54区に拳大の礫群あり。柱穴か。

10・29 54～53ラインまで。小路路面は、南側溝が北へ広がるため幅狭くなるも、全体の検出容易となる。

10・30 54～52ラインまで。柱穴多い。QTラインの鍵の手状の溝は、南側溝とは異なる。北側溝は、両肩とも明瞭に出る。炭化物含む土坑SK1965検出。

10・31 53～51ラインまで。長方形土坑SK1983検出。Fラインから北は、遺構面が高くなる。

11・1 遺構検出作業が発掘区東端にたどりつく。49～48ラインまで。井戸SE1555検出、枠内掘り下げる。埴多い。炭化物を含む土坑SK1968には、整形した凝灰岩あり。北側溝の肩は、発掘区東端では両肩とも急に落ちる。

11・2 遺構検出折返し。遺構を掘り下げながら

西向きに進める。48～50ラインまで。大土坑SK1985の東半分検出。ほぼ49ラインに沿って、SK1979・1981などの土坑が点々とある。

11・6 井戸SE1555の中央部掘り下げ開始。PF48の土坑は複数の円形土坑の集合であることが分かった。

11・7 49～51ラインまで。SE1555の井戸枠あらわる。北側溝は北で深く、南は浅い。暗灰粘土の下に灰色粘土の砂質土がある。南側溝は南が深く、北が浅い。埋土は均一で、一部に炭化物の層がある。東西棟SB1532検出。柱根残る。

11・8 49～51ラインまで。北側溝は北側がやや深くなり、灰色粘土が堆積する。南側溝は南が深くなり、砂の堆積が見られ、銅金具、須恵器壺出土。PD50に土師器小皿を入れたピットあり、その南に土師器壺を逆さにしたものがある。PH51区土坑SX1552は壁が焼けており、炭化物、鋳形状土製品出土。

11・9 48～52ラインまで。PC48区に井戸SE1530見え始める。東西棟SB1532検出。建物内に井戸あり。井戸の覆屋となるか。

11・11 49～53ラインまで。SK1987は炭化物が幾重にも堆積する土坑。SE1530は縦板組の井戸枠あらわる。北側溝は、掘り下げていくと、中央に高所が残り、2条の溝に分かれてきた。南側溝は51ラインで極めて浅くなる。

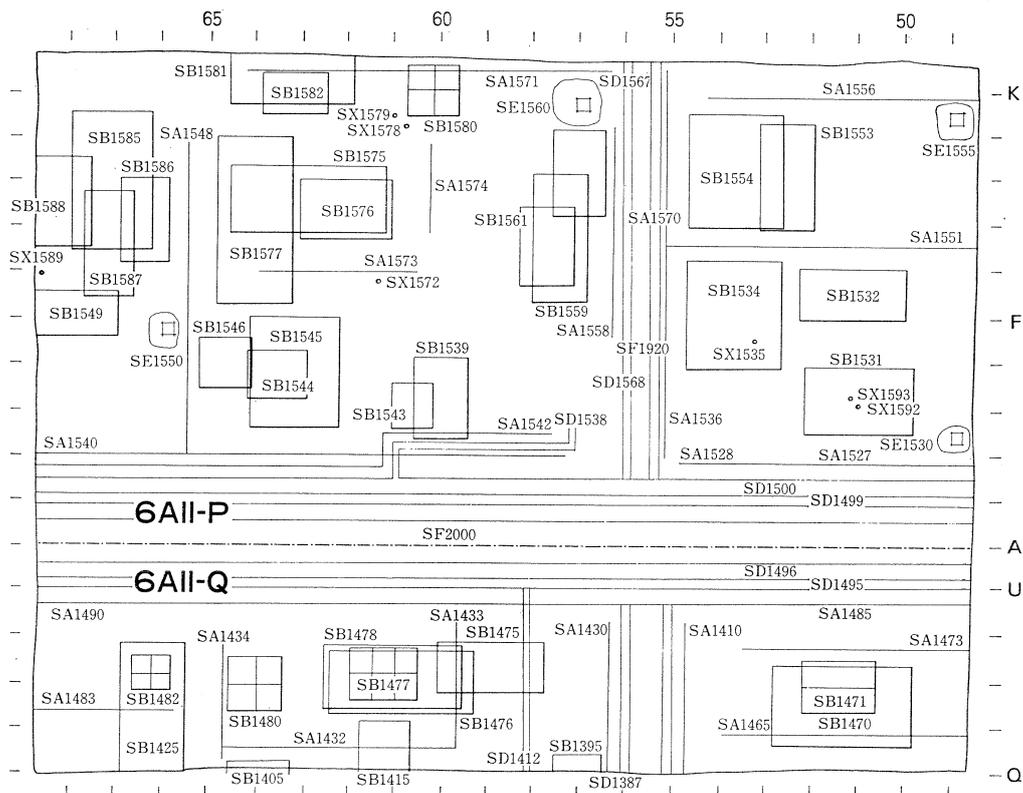


Fig. 9 第168次北調査地域の地区割と主要遺構 (1:500)

11・12 51～52ラインまで。53ライン西の南北に1列の柱穴は、2時期の重複あり、古い方の柱穴は浅い。PE53に須恵器杯を埋納した円形土坑SX1535あり。後に胞衣壺と判明。南側溝は52ラインあたりで消える。北側溝は南北2条の溝で、上層は埋土異なる。下層は、炭化物を含む暗灰土で、南側溝上層は灰褐色土で人為的に埋めている。

11・13 53ライン中心に遺構検出。小路上の土坑掘り下げ始める。SK1491は溝状を呈し比較的深い。炭化物を層状に含む。南北棟SB1554は、東底付きらしい。

11・14 54ラインまで。南側溝北肩の土坑SK1494から埴塀出土。炭化物が層状に詰まる。下層から二彩小壺出土。南側溝北部の浅い部分で炭の多量に詰まる土坑検出。上面では見えず、南側溝が機能していた時期にも工房的な使われ方をしていいる。土坑SK1515は浅いが、底に焼け壁のようなものが見られる。

11・15 54～55ラインまで。南北両側溝とも土層畔の観察では、それぞれが重複している。北側溝では北、南側溝では南が新しいと推定する。QU54区両側溝とも路面ぎわに炭化物土坑多い。ただし、南側溝は上層と下層に土坑あり、両側溝に地山に張出しあり、溝は2筋の流れがあり、重なる部分と重ならない部分とがある。

11・16 土坑SK1515は上層側溝に伴う炭化物含む土坑で銅滓出土。土坑SK1494から小形棒状木製品が多量に出土した。北側溝下層の土坑と同時期のものであろう。路面上に円形の土坑SK1508検出。

11・18 55ライン南半部中心に遺構検出。56ライン南側溝の地山張り出しは東西3m、柱穴らしき穴あり、橋脚か。最下層(新)の層には粘土と粗砂が堆積し、水分多い。地山張り出しは東端で北側溝(古)の末端検出する。南北溝SD1387は二重のように見えるが未確認。北側溝も張り出しまで確認。北側溝(古)の先端部分に製塩土器がままとまっている。北側溝から和同銭出土。L字型溝は出入口に関連するか。

11・19 56～57ラインまで。南側溝から冠帽破片出土。QT57区南側溝(下層)から唐草文鬼瓦出土。南北溝1387はほぼ完掘。中央が深くなり、底にさらにもう一つの溝確認。南へ続く。ただし、最古の溝は途中で切れる。都合3時期に分かれるが、最古を除く2時期はよく分からない。

11・20 南側溝では最下層新から三彩埴(垂木先瓦か)出土。北側溝57ラインでは完掘するが古溝はなし。南北溝SD1569掘り下げると底に小溝(SD1567)あり。板をうめこんだものか。南北溝SD1563でも同様のものが一部検出されている(SD1565)。南北塀SA1558は2時期ある。南北塀SA1563は、南北溝SD1563より古い。溝

から溝へ斜行する溝あり。

11・21 南側溝は58ラインまで完掘する。最下層から黒漆塗椀出土。北側溝も58ラインまでは掘り進む。南側に掘り残した灰褐色砂質土の部分には土坑が掘り込まれている。QS57区土坑は全体を掘り下げ始めた。井戸かどうかは未確認。南北溝(SD1568)の西にも南北塀を検出する。この区画の区画施設の変遷が相当に複雑なことが判明した。

11・22 南側溝58ラインまで完掘。土坑SK1469は、浅いすり鉢状で、南西に一段深い部分がある。北側溝58ラインまで掘り進み、南岸に細長い土坑が重複する。井戸SE1560掘形を掘り下げる。全体に遺物少量。

11・25 井戸SE1560は縦板の先端を検出。井戸枠内から土師器ミニチュア高杯出土。G～H区で大型の柱穴検出するもまとまらず。

11・26 南側溝は58～59ライン最下層の掘り下げ。北側溝は57～58で最下層南岸に東から続く溝SD1499あり。炭化物を多量に含むSD1499の方が北側溝より古い。

11・27 平瓦を3枚重ねて並べる暗渠SX1489あり、南側溝との先後は不明だが新溝と共存するか。東西に長い土坑をSK1474の底で柱穴検出する。南側溝59ラインまで完掘する。北側溝58ラインまで完掘。南岸に不整形土坑多数あり、いずれも炭化物を含み北側溝と同時期のものと古いものとが混在する。北側には柱穴3個がある。土坑1984とSK1989は接するが、重複はしない。円形土坑SK1984は井戸ではないことが判明。SK1989は東で検出した炭化物を含む浅い土坑と似る。

11・29 南北両側溝60ラインまでほぼ完掘。南側溝北岸にある東西方向の土坑SK1517は60ライン付近に多量の灰、炭が堆積。土坑SK1518は中央に暗灰土、外側に黄色粘土が輪状に入るすり鉢状を呈する。SB1575はこの地区の主屋か。

11・30 南側溝最下層61～62ラインまで。南側溝(新)最下層北側に、炭化物の堆積あり、東西に長い溝状の土坑SK1517である。東西棟3×2間のSB1576には、東西棟4×2間のSB1575が重複する。

12・2 南側溝62ラインまで完掘。62区では、新溝が古くなり、埴塀、鉾津など出土。63ライン上層では、右京二条二坊十六坪(第137次調査)出土例と同じタイプの埴塀出土。北岸には、古い土坑がある。北側溝62～64ラインまで。北側溝の北側に、やはり築地寄柱穴状の小柱穴がある。南既掘地では、東西棟がまとまり始めるも、南側溝の南側には柱穴が続かず、閉塞施設の存在は不明。土坑SK1971は、埴塀出土し、重複する柱穴SB1544・1545より新しい。土器埋納坑SX1572検出。SB1575の掘形は、大型で、北側には、凝灰岩の

大破片が入る。

12・3 南側溝・北側溝とも64ラインまで完掘。南側溝は最下層(新)が再び深くなる。北側には、断続的に続く不整形土坑があり、鞆羽口出土。北側溝は炭化物含む埋土を新溝が切る。南北溝S D 1583は、とぎれながらも南へ続く。その東に南北方向に浅い土坑状の溝S D 1547の北部検出。南側溝では、61ライン以西で上層と最下層のみの2層となる。

12・4 南側溝・北側溝とも64~65ラインまで。南側溝65以西は幅が広がるか。もしくは、北岸土坑(最下層古)が北へ広がるものか。漆附着土器出土。北側溝から土馬出土。溝S D 1484は南側溝に埋土が切られる。南北溝S D 1547から軒瓦出土。この溝は、北では新田2時期ある。南北塀S A 1573まとまる。東西棟S B 1575の柱穴は2箇所所で3時期の重複あり。

12・5 南側溝65ラインには、新たに、北への張り出しあり。小型井戸S E 1550検出。

12・6 南側溝67ラインまで。複雑な堆積状況である。P C 66区大土坑は炭化物が大量につまる。S B 1587柱列には、角柱あり。S E 1550の枠は、上部が縦板、下部が横板。動物遺存体が出土した。

12・7 南側溝66~68ラインまで。北側溝は、66~67ラインまで。

12・9 現地説明会に向けて清掃と遺構検出を並行して行なう。南側溝北岸に、土坑のような炭化物を含む土の堆積がある。路面上にも汚れた土が見える。北側溝は66ライン掘り上げ。最下層新とした層の最下部に、灰色粘土の層がある。

12・10 南側溝北岸には、新溝に切られる土坑あり。発掘区西端では、古溝が比較的明瞭に見える。

12・11 清掃と遺構の精査。土層観察畔65・61ライン土層図作成の後、撤去。

12・12 清掃続行。午後新聞記者発表。

12・13 全域の清掃。P C 53土坑S K 1965掘り下げ。軒丸瓦、埴出土。

12・14 午後、現地説明会行なう。来聴者約70名。

12・16 写真撮影に向けて清掃作業。南側溝、北側溝の計4箇所溝堆積状況の土層図作成。

12・17 南側溝、北側溝の堆積状況の土層図作成完了し、畔撤去する。土層畔の観察から南北溝S D 1486より南側溝の方が新しいことが判明。発掘区東南部で柱穴の掘り下げにかかる。

12・12 清掃続行。井戸枠の洗浄、枠内遺物取り上げ。S E 1550掘形の掘り下げ。

12・19 写真撮影開始。通常の地上撮影の他に、ハイライダーを利用しての撮影も行なった。本日は全景中心。

12・20 遺跡全景及び遺構細部の写真撮影を行なう。本日もハイライダーを利用する。

12・23 昨夜降雨あり。排水作業と清掃。航空写真測量のための標定点設定作業完了。

12・24 午前清掃。午後空中写真撮影及び地上写真撮影。

12・25 地上写真撮影続行。遺構細部中心。土器埋納坑S X 1593検出。

12・26 写真撮影続行。S X 1593さらに下にも土師器が重なっていた。瓦組暗渠S X 1489の瓦取り上げ。調査が年を越すため、砂埋めを中心として遺構の養生作業を行なった。

1・7 作業再開。一面降雪に覆われ、水中ポンプ凍結す。発掘器材搬入行なう。

1・8 柱穴等の断ち割り調査開始。土器埋納坑S X 1578では金箔も出土し、地鎮具埋納坑と思われる。

1・9 断ち割り及び実測続行。S B 1534は柱下に石と木材を入れている箇所あり。

1・10 井戸S E 1555枠内の掘り下げ開始。軒丸瓦6316K型式出土。S B 1532の北側柱列は土坑S K 1980より新しいことが判明。S B 1980には、柱根残る。

1・11 東西土層観察畔の断面図作成。井戸S E 1555の掘り下げ。須恵器大型甕口縁部あらわす。井戸内遺物の水洗選別作業始める。他にS E 1530、Q S 区の東西溝S D 1440掘り下げ開始。

1・13 井戸の掘り下げ。S E 1555からは、銅片、桃核、斎串など出土。

1・14 S E 1530・1555の実測完了。S E 1560の掘り下げ開始。S K 1989掘り下げ、丸瓦など出土。S B 1537に、大型柱根、礎盤あり。

1・16 井戸S E 1555の掘形断ち割り、写真撮影。S E 1530の掘形は1時期と判明。S E 1560は横棧3段分確認。井戸底には、拳大の礫を敷く。井戸内から、神功開寶、榎、ガラス小玉など出土。

1・17 S E 1530底まで掘り下げ終了。銅片あり。発掘区西壁清掃。

1・18 S E 1560掘形の掘り下げ。南北両側溝西側の掘り下げ。

1・20 S E 1555の井戸枠取り上げ。須恵器長頸壺、短頸壺、鉄釘、曲物など出土。南北溝S D 1547は、中央のみ深く、南で浅くなる。ただし、底だけが残った南北溝と考えられる。S E 1550は、浅く、井戸の部分のみ深くなる。

1・21 S E 1555堆積土の水洗選別完了。銅銭、「富本銭」、榎、基石(?)など遺物豊富。S E 1560は枠取り上げ。S E 1550は縦板下端まで断ち割る。小路路面上の土坑を断ち割り。

1・22 S E 1550断ち割り。重複する古い井戸は底が出る。古い井戸を埋めた土を新しい井戸の掘形が切る。東西溝S D 1440はとぎれ、L字形の部

分は、ごく浅い窪みのようなもの。この溝の底で柱穴を確認する。南北溝 SD1464も途中で切れる。

1・23 SE1550は枠取り上げる。埋土は4層あり。和同銭、帯金具など出土。掘形から窠状木製品出土。これで、すべての井戸枠取り上げ完了。砂の搬入など埋め戻しの準備にかかる。

1・24 柱穴、土坑の断ち割り、南側溝土層観察の精査。砂による養生開始。

1・25 養生作業続行。一部埋め戻しにはいる。

1・27 砂養生完了す。発掘器材撤収し、調査終了する。

E 第179次調査

6 AII-O 地区

1986年11月7日～12月26日

11・10 発掘区設定。ベルト・コンベアーを利用し、人力による表土除去開始。作業は西から東へ。土層観察畔を十字形(交点OA49)に設定。

11・12 表土及び暗灰砂質土の掘り上げ。

11・15 遺構カード作成。

11・17 48～50ラインまで。西向きに掘り下げ続行。OF49区東西溝中の小ピットに逆位置の土器あり(SX1947)。このあたり小ピット群多い。

11・18 50～52ラインまで。遺構検出ほぼひととおり済む。

11・21 53～54ラインは柱穴、ピットなどの掘り

下げ。54ライン以西の掘り下げ開始。ピット多く、すり鉢状のもの目立つ。柱穴でないものが含まれているようだ。

11・26 53ラインから東に折返し52ラインまで。遺構の掘り下げにかかる。OD～QP区は大きな土坑が5～6基重複している模様。先後関係は極めて見にくい。南北方向の道路SF1650確認。両側溝SD1648・1649を伴い、西側には平行して塀SA1647がある。道路、塀ともSラインでとぎれる。第168次北調査で検出した南北築地SA1570の北延長上にあたる。

11・27 54～57ラインの遺構精査。OD・OE51の大土坑は四隅の柱を確認し、井戸と判明(SE1870)。大土坑(のちに井戸SE1917と判明)の直下に炭化物多量に含む層があり、銅針出土。

11・29 OQ50～OB51区の土坑群は、いずれも深さ20～30cmと浅い。OE51区の土坑には、角材がのぞく。

12・1 48～50ラインまで遺構の掘り下げ。南北棟SB1781は6×2間でまとまる。

12・2 48～47ライン。O・Q以南の総柱建物SB1609は、もう一棟重複している可能性あり。

12・3 48～47ライン遺構の掘り下げ続行。

12・4 OE47区で井戸SE1867のプラン検出。豪雨で作業中断。

12・5 48～45ラインまで。SE1867の掘り下げ開始。埋土(廃絶時)から軒丸瓦6311型式出土。炭化物含む土坑群の掘り下げほぼ完了。OA以南は包含層または整地層と思われる層が現れ、宋銭

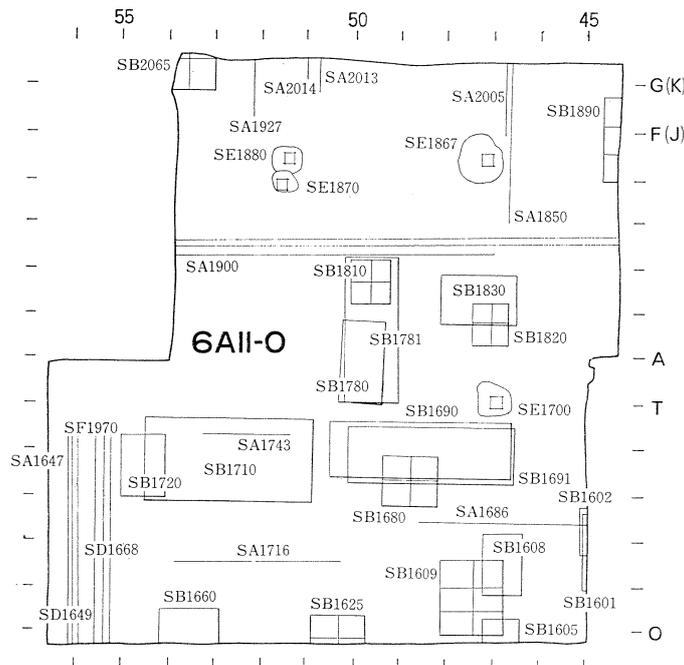


Fig. 10 第179次調査地域の地区割と主要遺構(1:500)

出土。O T46区井戸S E1700掘り下げる。

12・6 全体にわたる遺構検出ほぼ完了する。45～46ライン、A以南の包含層または整地層と思われる層の掘り下げを開始する。地山は、西から東に向かって、徐々に下がる。A以北では南北溝S D1898を確認。

12・9 44～46ラインまで。南北溝S D1898の検出を完了。南北棟S B1601の西側柱列検出。

12・10 現地説明会に向けて周辺を整備する。

12・11 新聞記者発表。

12・12 周辺整備と地上写真撮影。全景写真完了、細部写真未完。

12・13 午前、空撮用標定点設定。午後、現地説明会。来聴者約40名。

12・15 前日の降雨で、発掘区水浸し。終日排水作業。

12・16 地上写真撮影。本日は細部写真中心。

12・17 地上写真撮影続行。土坑と井戸の撮影。

12・18 午前、空撮終了し、午後井戸S E1880の掘り下げ。土層観察の精査。

12・19 S E1867の掘り下げ開始。井戸枠は縦板

組、埋土から土器出土。S E1880は枠内完掘す。埋土は水洗選別行なう。O E51区土坑は枠が現れ井戸と判明（S E1880）。

12・22 O T47区井戸S E1700は、上部横棧が新しい時期のもの。初めの井戸枠はくりぬき円形で、横木でつなぎあわせている。S E1880は横板組。掘形の精査を行なう。

12・23 S E1880掘形を掘り下げたところ底に横板一段のみ残す井戸を検出し、新・旧2時期の井戸の重複が明らかになった。S E1917は井戸底に達する。S E1700は、古い時期の掘形掘り下げ開始。柱穴の断ち割りも始めた。

12・24 柱穴の断ち割り継続。断面実測。

12・25 S E1867は上部と下部に縦板が分かれ、後補があることが判明。

12・26 柱穴断面実測。調査区周囲の壁面土層図実測完了。

12・27 S E1867底部まで掘り下げ、断面実測するも、直後に崩壊し、枠板取り上げ不能となる。本日で調査終了。

5 写真測量

人間が対象物を立体的に見ることができるのは、左眼と右眼によって、やや異なる位置から見ているからである。たとえば、ある対象物をやや視点をかえて写真撮影し、この2枚の写真を並べて左右両眼で重複させて見る（実体視する）と、対象物の像が立体的にうかびあがってくる。この原理を応用したのが写真測量である。すなわち写真測量は、対象物を写真に撮影することによって、その中に表現されている事柄を判読し、それをもとに対象物を図面にかきあらわす測量のひとつの方法だといえる。写真測量は、おおよそ以下の手順で行なう。

①基準点（標定点）設定 対象物の水平位置や凹凸を正確に判読するためには、あらかじめ対象物の表面に基準点（標定点）を設定しておかなければならない。この基準点の三次元座標をもとに、写真の正確な水平方向、縮尺が決定できるわけである。標定点は、縦方向と横方向の水平が決定できるように1枚の写真の中に3点あればよい。

②撮影 カメラは、一定の距離において左右両方にレンズのついたステレオカメラをもちいる。撮影の方法は、平面図作成の場合には、縮尺に応じてクレーン、熱気球、ヘリコプター、セスナ機などにそれぞれカメラを搭載し、空中から垂直に撮影する。これに対して立面図作成の場合には、地上に三脚を立て、これにカメラを装着して撮影する。埋蔵文化財の写真測量の場合、調査区が大面積で、しかも平面的である場合には、ヘリコプターから写真撮影を行なうことが多い。ヘリコプターは空中静止ができるうえに、連続撮影が迅速に行なえるという利点がある。

③図化 最終的に撮影した写真は、写真図化機をもちいて、地物や地形の凹凸を描画する。さて、写真測量が遺跡の発掘調査に用いられるようになった経過について、少しふれておこう。平城京の発掘調査に写真測量が導入されたのは、1963年の平城宮内裏における調査が最初であった。これは地上において水平撮影し、平面図に書きおこす試みであったが、地形の凹凸による死角が生じ、多くの図化不能の箇所が発生するという欠点があった。1968年にヘリコプターから垂直撮影を行ない、写真図（フォトマップ）として遺跡の平面図を作成する技術が導入された。フォトマップは、写真を地形の高低に合わせて正しい縮尺に焼付し、このうえに等高線図を合成したものである。しかし、ヘリコプターの高度とレンズの焦点距離の制約を受けて縮尺は1/40が限度であり、従来行なわれてきた地上測量、すなわち遺方実測の縮尺である1/20に達することはできなかった。この点を打開するため、櫓上から撮影したり、熱気球、クレーンなどにカメラを装着して撮影する方法が試された。いづれも大縮尺の図を得るといふ点では有利であったが、櫓による死角がどうしても生じたり、風によって熱気球が不安定となる、あるいは大面積の場合にはクレーンのアームが被写体に達しない、などの欠点があった。今日では、これらの撮影方法に改良が加えられ、種々の方法を使い分けたり併用したりすることによって、より効率的な写真測量が行なわれるようになってきている。

ところで、従来埋蔵文化財に用いられてきた地上測量は遺方実測だが、これと写真測量との比較をまとめると以下のようなになる。

①写真測量は、写真という生の記録をもとにしているがゆえに、実物にきわめて忠実であ

1) 奈良国立文化財研究所『年報 1969』1969, p. 3「写真測量の文化財調査への応用Ⅱ」参照。

No.	X	Y	Z	No.	X	Y	Z
1	-149,093.371	-19,062.039	53.118	61	-149,056.117	-19,039.366	53.881
18	-149,111.564	-19,062.039	53.102	69	-149,099.026	-19,024.848	54.248
23	-149,111.564	-19,027.305	54.654	71	-149,056.117	-19,009.839	54.435
32	-149,129.850	-19,062.039	53.098	79	-149,022.092	-19,025.148	53.882
36	-149,129.850	-19,034.203	52.923	83	-149,022.092	-18,997.771	53.938
45	-149,146.174	-19,062.039	54.563	91	-149,040.636	-19,004.032	53.806
56	-149,056.117	-19,052.000	54.076	103	-149,040.913	-19,034.189	53.847

Tab. 2 写真測量標定点成果表

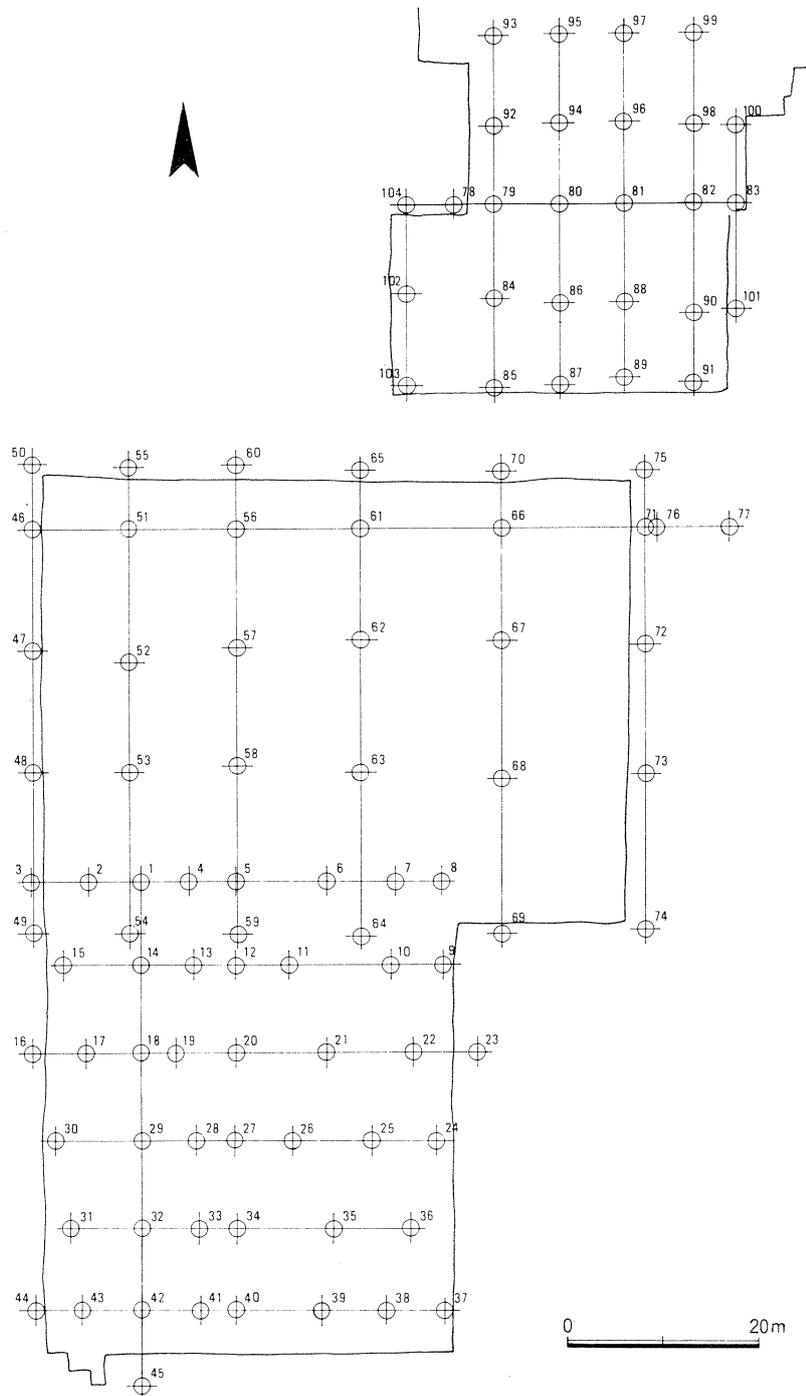


Fig. 11 写真測量標定点配置図

る。遺方実測では、描画技術の個人差や、実測者の遺構に対する解釈の違いが、図面に微妙に反映することがある。これに対して、写真は撮影時の被写体との距離、フィルム、レンズ、あるいは写真乾板の解像度によって科学的に裏付けられているため、客観的かつ忠実である。また、写真を保存さえしておけば、随時撮影時の状況を再現することができるし、再測も可能である。

②地上測量では基準点から遠ざかるにしたがって精度は低下するが、写真測量は写真の歪みを修正すれば精度は均一である。

③写真測量では、外業が標定点の設定と写真撮影だけであり、業務の省力化と迅速化をはかることができる。ただ、発掘担当者と写真図化担当者との職域が分化しているため、どうしても描画のうえで齟齬が生じやすい。この点は何度かの校正で是正できるが、時間がかかる。つまり、写真測量では外業の省力化が可能となる反面、撮影後の図化・校正などの内業に時日を要するわけである。

④写真測量では、ヘリコプターによる1回の撮影に50～60万円、写真図化に1㎡あたり700～800円と経費がかかるという難点がある。

以上のように写真測量は多くの長所をもってはいるが、比較的高価であり、場合によっては遺方実測の方が好適であることもある。調査区が小規模であったり、複雑な地物が少ない場合がそうである。これに対して急峻な地形に位置し、遺方実測が困難な場合とか、遺構が稠密である場合、あるいは面積がきわめて大きい場合には、写真測量は大きな効力を発する。したがって両者は、遺跡の種別、立地、調査期間、調査面積、経費などによって、それぞれ選択される必要があるし、また相互の欠点を補完するうえで両者を併用する場合も生じてくるであろう。

本調査は1984年～1986年の計5回にわたる継続的な調査であったが、1984～85年の調査（大和郡山市調査・第156-32次調査）のみ遺方実測を行なった以外は、主としてヘリコプターによる写真測量を行なった。それぞれの手法は、上記の①～④を勘案して選択している。

このたびの写真測量の標定点成果表（Tab. 2）、標定点配置図（Fig. 11）、撮影仕様（Tab. 3）を掲げておく。なお、座標値は、国土調査法にもとづく国土方眼第VI座標系を基準としている。

カメラ	レンズ	フィルム	露出	絞り	変位修正機
168次南調査	RMK-A	153.21 mm コダック TRI-X	1/400秒	11	ツァイス SEGV
168次北調査	〃	153.00 〃	1/450秒	8	〃
179次調査	〃	153.21 〃	1/400秒	8	〃

Tab. 3 写真測量撮影仕様